

Bulletin of the Institute of Buddhist Culture
of Tsurumi University
No. 20, 2015

鶴見大学仏教文化研究所紀要 第二十号 抜刷
平成二十七年三月三十一日
発行

歯科衛生科の学生と宗教学
——必修科目としての位置づけと留意点——

佐藤 達全

歯科衛生科の学生と宗教学

—必修科目としての位置づけと留意点—

鶴見大学仏教文化研究所所員 佐藤 達全

一、はじめに（無宗教と公言する日本人）

日本人の多くが自分の宗教について聞かれると「自分は無宗教だ」と答えるという。しかし、本当に宗教を否定している人はきわめて少ないとも言われる。その証拠として、多くの日本人が正月の初詣や彼岸・お盆の墓参をしていることが指摘されている。毎年、正月が終わると初詣の人数が発表されるが、その数は8000万人を超えている。また、文化庁の宗教別信者数調査をみると、その総数は二億人を超えているという驚くべき統計が出ている（文化庁〈宗教年鑑〉）のである。

このような日本人の「宗教意識」と「宗教的な行動」のギャップについて、阿満利磨は「本当に宗教を否定したり、考え抜いた上での無神論者はきわめて少ない」として次のように述べている。

日本人の多くが「無宗教だ」というときには、「特定の宗派の信者ではない」という意味なのであり、キリスト教徒などという「無神論者」ということではない。¹⁾

そして、各種の調査で日本人の7割が「無宗教だ」と答える一方で、そう答えた人の75パーセントが「宗教心は大切だ」とも答えていることから、日本人の多くが「宗教心は豊かなのである。ただ、その宗教心を〈特定の宗教〉に限定されることに抵抗がある」と結論づけている⁽²⁾。

こうした日本人の宗教観について、ドイツ出身（ベルリン自由大学の哲学科修士課程を修了し京都大学に留学）で、出家得度して曹洞宗・安泰寺（兵庫県）の住職をしているネルケ・無方は、

日本人はなぜ宗教に無関心なのか。この疑問は、私が「禅」の勉強をするため来日したときに感じたものでした。日本人の多くが禅のことを深く知らず、宗教そのものにも無頓着だと愕然としたのです。正月には神社へ初詣に行き、結婚式を教会のチャペルで挙げ、葬式には僧侶にお経をあげてもらう。なんとも不思議な宗教観を持った人々だと思いました。⁽³⁾

と、来日当初の印象を記した上で、現在は「日本人の宗教観は、欧米人からすればおかしい感覚である。でも、捉え方次第では、すばらしいものではないか」と変化したと述べている。

そして、「日本人は宗教には無関心である。これは事実だ。日本人は無宗教である。これは事実⁽⁴⁾に反する」と結論づけた上で、自身の妻（日本人）の宗教意識を例にあげて「私の妻も含め、日本人は、特定の宗教を信仰しているという意識が希薄だ。ただし、無宗教だからといって、妻は仏教を否定しているわけではない。妻はお盆やお彼岸には祖母の墓参りをするし、私と一緒に寺に住んでいる⁽⁵⁾」と、日本人の宗教意識を指摘している。

さらに、彼は日本人の宗教意識について

日本人にとつての宗教は、空気を吸って吐くようなものではないだろうか。宗教心があふれているからこそ、無宗教に見える。だから、他宗教に対して寛容にもなれるし、宗教を理由に他人を否定する必要もない。宗教に無関心である日本人は、最も宗教的な人々だと私は思う。⁽⁶⁾

と述べ、さらに日独の学校教育と宗教の関係について、給食や部活動・掃除を取り上げながら次のようなきわめて興味深い指摘をしている。

日本には宗教の授業がないが、悲観する必要はない。日本の学校では給食が出る。給食の前には全員で「いただきます」と言い、食べ終わったら「ごちそうさまでした」と言う。部活動で、仲間の大切さや協調性を体で覚える。自分たちが使っている教室やトイレは自分たちで掃除をする。これは禅の教えを実践していることなのだ。⁽⁷⁾

それゆえ、ネルケは「日本人に〈宗教〉は要らない」と言うのである。

ネルケの指摘はそれとおりであるが、だからといって日本人が宗教に関する知識を持たなくてよいということにはならない。

たしかにネルケが指摘するように、日本人同士なら、そうした宗教意識は共有できるであろうが、国際的な人的交流がますます活発化している現代社会で円滑なコミュニケーションを図り、国際間の摩擦を生じさせないためには、宗教が背景になっていると考えられる価値観や考え方や行動習慣を理解することは非常に重要である。また、医学や科学が進歩するにつれて、生命倫理に関わる分野においても宗教の果たすべき役割は増大するであろう。

二、学校における宗教教育

ところが、日本の学校教育において宗教全般に関する知識を教育しようとしても、多くの法律的な制約がある。学校における宗教教育に関連する法律として、【日本国憲法】第20条には〈信教の自由〉が定められている。

信教の自由は、何人に対しても是を保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使用してはならない（第1項）。

何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない（第2項）。

国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない（第3項）。

さらに信教の自由を保障するために「政教分離原則」の制度を作って、国家が特定の宗教を優遇しないことを明確にしている。

信教の自由は明治憲法下でも保障されてはいた（明治憲法28条「安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限」で保障されていた）が、当時は事実上国家神道が国教とされていて、当時の日本政府がこの国家神道を都合の良いように利用していた時期があったことは否定できないと言われる。

これに対して、【日本国憲法】第20条の要点は次の三点である。

①信仰の自由＝個人が宗教を信仰し又は信仰しないことを選択し、又は変更すること、個人が任意に決定できることを意味する。

②宗教的行為の自由＝信仰に関して個人が単独又は他の者と協働して祭壇を設け、礼拝や祈祷を行うなど、宗教上の祝典・儀式・行事その他布教などを任意に行う自由。同時に、このような行為をしない自由やこのような行為に強制的に参加されない自由も含まれる。

③宗教的結社の自由＝特定の宗教を宣伝し、共同で宗教的活動を行うことを目的とする団体を結成する自由のこと。このような宗教団体に加わらない自由も保障されている。

さらに、【日本国憲法】第89条には、信教の自由を保障するために〈政教分離原則〉が定められている。

公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。

こうした憲法の規定に基づいて、【教育基本法】には〈宗教教育〉について次のように示されている。

宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない。

2 国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。
(第15条)

このことに関連して私立学校における宗教教育に関しては、【学校教育法施行規則】に次のように示されている。

小学校の教育課程は、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭及び体育の各教科（以下この節において「各教科」という）、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間並びに特別活動によって編成するものとする。

②私立の小学校の教育課程を編成する場合は、前項の規定にかかわらず、宗教を加えることができる。この場合においては、宗教をもって前項の道德に代えることができる。(第50条)

こうした規程を背景にして、学校における宗教教育に対してさまざまな議論がなされていることは周知の通りであるが、本稿ではそうした問題を論ずることが目的ではないため、これ以上は触れない。

すでに述べたように、私立学校において宗教教育を行うことにはなんの問題もないため、小学校から大学までさまざまな形で宗教教育が行われている。曹洞宗の大本山・總持寺を設置母体とする鶴見大学でも「宗教学」が全学生の必修科目として設定されている。

そこで、筆者が担当する歯科衛生科(一年生)の宗教に関する意識と、亜満利磨が「宗教心は豊かなのである。ただ、その宗教心を〈特定の宗教〉に限定されることに抵抗がある」と結論づけた日本人の意識とを対比させて考察し、今後の必修科目としての「宗教学」のあり方を探ってみたい。

三、必修科目としての位置づけ

(1) 建学の精神(大学案内に示された建学の精神)

すでに述べたように、鶴見大学は曹洞宗大本山・總持寺が設置母体である。そこで、「大学案内」には、学生に対する基本的な教育方針が次のように示されている。

本学は、仏教、とくに禪の教えにもとづいて、円満な人格の形成と人類社会に対する感謝・報恩の実践をもつ

て建学の精神としています。この精神を本学の創設に深くかかわられた中根環堂先生は「大覚円成報恩行持」の二句八字をもって示されました。これをわかりやすく表現すれば、「感謝を忘れず真人となる」あるいは「感謝のこころ育んでいのち輝く人となる」となります。

人類は、みずからの「知」によって優れた技術を生み出し、物質的繁栄をもたらしました。しかし、その一方で、他者に対する思いやりの心や、広く社会のために尽くそうとする高邁な精神を見失いがちになりました。さらに、現在は、自然破壊を進めるなどのことによつて、地球そのものの存続すら懸念されるほどになっています。私たちは、この点を深く反省して、人として生をうけたことに感謝し、自然との「共生」と相互の「共成」に努めなければなりません。

本学で学ぶ皆さんが、優れた知恵と豊かな心を具える人間として、明るい未来の創造に貢献できる存在へと成長していつてくれることを、心から期待します。

(2) 大学で行っている宗教行事

このような建学の精神に基づいて、学事日程には次のような宗教行事が示されている。

〈釈尊降誕会〉(4月8日)

仏教の開祖釈尊(お釈迦さま)の誕生を祝う行事。

〈精霊祭〉(7月初旬)

過去一年間に亡くなった学園関係者の魂を迎え、供養する行事。

〈御征忌〉(10月12日・15日)・〈太祖降誕会〉(11月21日)

鶴見大学の母体である大本山總持寺御開山太祖常済大師(瑩山紹瑾)のご命日の法要と太祖常済大師の誕生を

祝う法要。

〈成道会〉（12月8日）

釈尊が悟りをひらいたことを祝う行事。

〈涅槃会〉（2月15日）

釈尊の入滅を悲しみ生前のお徳を偲ぶ行事。

しかし、このような行事が行われてはいるものの、授業時間の関係等で、参加する学生は必ずしも多くない。もちろん、参加した学生に出席カードを提出させて「宗教学」の成績評価に関連させる等の試みはなされているが、学生が主体的に参加し、建学の精神を積極的に学生生活につなげることができるとは定かでない。

ただ、それとは別に一年生の新学期に、全学生を対象にした大本山總持寺における一泊参禅会（坐禅体験）が実施されている（学科ごとに実施）。そのときに全員が提出するレポート（感想文）を読むと、拒否的な反応を記している学生がいらないわけではないが、新鮮な感動を記している学生が少なくない。

（3）教育目標と人間形成

〈教育の目標としての望ましい人間像〉

ところで、歯科衛生科ではどのような歯科衛生士を育てようとしているのであろうか。上述した建学の精神を基に、歯科衛生科のカリキュラムポリシーについて「歯科衛生科では、建学の精神に基づき深い教養と良識ある歯科衛生士を育成するための教育課程を編成している（後略）」と示されている（平成26年度歯科衛生科授業計画より）が、これだけでは十分にその内容が伝わってこないもので、次に短期大学の履修要項に示された「短期大学の教育方針」建学の精神の具現化をめざして」を示しておこう。

本学の教育の理念は、設置母体である曹洞宗大本山總持寺の發願をよりどころとする、仏教主義による禅の行持の実践を目指す教育にある。

建学の理念を表す標語として「大覚円成」「報恩行持」の二句八字が用いられている。これは初代学長中根環堂先生が總持寺御開山で学祖と仰ぐ瑩山禪師の御垂示（教え）から選ばれた句で、曹洞宗の実践目標である「さとり地完成」と「利他行の実践」を示しており、これを教育目標に置き換えれば、仏の教えに基づく人格の完成と社会への恩返しという奉仕活動のことである。

さらに、本学では、この標語を「感謝を忘れず、真人となる」「感謝のこころ育んで、いのち輝く人となる」と、現代語に分かりやすく言い換えて、学生の皆さんに提示している。

本学においては、以上の教育の理念、建学の精神を学生の皆さんにも理解してもらうため入学式や卒業式をはじめとして、新入生一泊参禅会、精霊祭、御征忌、太祖降誕会、成道会、涅槃会等の諸種の宗教行持の場を通して周知をはかっている。また、保育科においては「仏教保育」「宗教学」、歯科衛生科においては「宗教学」等の本学独自の授業科目を開講し、これらの学修を通じても教育の理念、建学の精神の理解を深めるようにしている。（平成二六年度短期大学部履修要項より）

このように、人格形成（人間形成）の一助として宗教教育を位置づけていることが伺える。

四、現代社会における宗教教育の必要性

(1) 日本人の宗教意識の特徴（無宗教と公言する日本人）

すでに多くの指摘があるように、無宗教とはいふものの「宗教的」とみられる活動をしている日本人は非常に多い。しかも、一つの宗教に関わる活動でなく、いくつもの宗教に関連した活動をしている点も日本人独特の宗教的活動と言われている。個人として特定の宗教を信奉しているのではなく、代々続く「家の宗教」としてほとんどの距離を保ちながら活動をしていることも特徴の一つと言えるであろう。これに関連した現象として、一つの家の中に仏壇（仏教）と神棚（神道）の両方を祀っている例も少なくない。

このような状況は一神教的な視点からは理解されにくいかもしれないが、これは、古くから「八百万の神々」という精神的風土の中で営まれてきた日本人の宗教活動の特徴と言えるのではないだろうか。

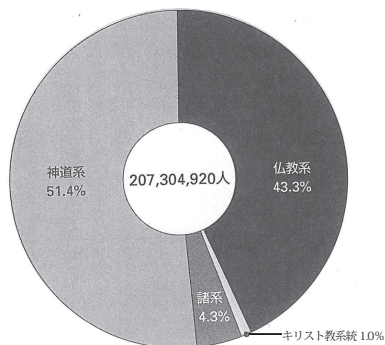
それゆえ、日本人が「無宗教です」と言ったときの概念は「宗教そのものを拒否したり否定したり」しているのではなく、特定の宗教だけを深く信奉しているのではないという意味に受けとめなくてはならないであろう。

(2) 宗教的な行動が多く見られる日本人

特定の宗教にこだわらないという日本人の国民性は、宗教に関連した各種の統計に明確に示されている。その一例を次に示しておこう。

*日本の宗教集団の合計信者数（統計表）

わが国の宗教別信者数[2009(平成21)年12月21日現在]



出所：文化庁『宗教年鑑』、平成22年版

※統計数理研究所が行っている国民性調査（平成25年）によると、宗教に対してつぎのような結果が出ている。

あなたは宗教を信じていますか	はい 28%	いいえ 72%
宗教心は大切だと思いますか	はい 66%	いいえ 21%

(3) 歯科衛生科の学生の宗教意識

日本人の宗教意識の特徴についてはすでに阿満の見解を紹介したのであるが、鶴見大学の学生も例外ではない。それは次のような点である。

- ① 強くない宗教意識（一般的な日本人の感情と同様）
- ② 否定的なイメージを持つ学生も少なくない（強制されることは好まない）
- ③ 宗教に無関心な学生（積極的な関心は持たない）

そのため、授業を前向きに受けとめてもらうためには、そうした特徴を前提にする必要がある。

五、授業にあたつての基本姿勢

(1) 授業の方向性

そこで、講義を行うに当たっては、多くの学生が宗教にはあまり関心を持っていないであろうことを想定して（日本人の無宗教という意識を前提とし、さらに近年の学生が自分の専攻科目に直接に結びつく授業以外にはあまり興味を示さない傾向をも前提として）、できるだけ関心を示してもらえように、次の四点に配慮した。

- ①信仰を強要するものではないこと
- ②宗教に関する知識が生活に必要であること
（日本人の生活が宗教と大きく関わりを持つているため）
- ③宗教のよしあしを価値判断しない姿勢を貫くこと
- ④似而非宗教に惑わされないために宗教の知識が必要であること

こうした点に配慮して講義の流れを組み立てた。さらに、授業ではできるだけ学生の日常生活につながる具体的な事例を紹介しながら、宗教が身近な存在であることが理解できるように工夫した。

そのために、授業計画には副題を「宗教と私たちの生活」とし、授業の目的や到達目標を次のように設定した。

◇講義の目的

(イ) 宗教は世界の様々な人びとの生活に大きな影響を与えている。そこで、宗教とはなにかを一緒に考えてみる。

(ロ) 様々な国の人びとの交流が盛んな現代社会では、お互いが理解し合うために宗教の知識は非常に重要である。

そこで、人生観や価値観と宗教の関係について考えてみる。

(ハ) 本学の建学の精神を基礎づけようとしている仏教や禅の教えがどのようなものであるかを紹介する。

(ニ) 歯科衛生士の仕事と仏教がどのように関係するかを考えてみる。

その上で、到達目標を次のようにした。

◇到達目標

(イ) さまざまな宗教についての基礎的な知識を理解することができる。

(ロ) 異なった文化や価値観を持った人を理解することができる。

(ハ) 自己のよりよい生き方を考える手がかりにすることができる。

(ニ) 鶴見大学の建学の精神を理解して今後の生き方につなげることができる。

(2) 具体的な講義内容

このような方針で次のように講義を展開した。各講義のテーマと毎回配布したレジュメの要点を紹介してみよう。

第1回 宗教について（なぜ宗教学を学ぶのか）

① 鶴見大学の建学の精神と宗教

大学には建学の精神があつて、学問だけでなく在学中に形成される人間性が社会では評価されること。

② もう一つ大切なことは、多くの日本人はあまり意識していないものの、外国人との交流が盛んになった日本では、宗教についての正しい認識を持たないと仕事や生活面でさまざまな問題が発生する恐れがあること。

日本人は宗教的に曖昧な態度をとることが多い。これは日本人同士なら理解し合えるが世界では通用しないことが少なくない。その理由は先進国で一神教を信仰している人が多いからである。

この授業は、宗教を信仰しなさいと勧めるためのものではなく、世界の人びとが宗教に対してどのような意識を持っているか、そして、宗教が人びとの暮らしにどのような影響を与えているかについて学ぼうとするものである。

第2回 宗教の起源（なぜ人は宗教を考えたのか）について

① 宗教とはなにかについて説明する（宗教を定義することは難しいこと、宗教とはなにかという問いに対する答えが宗教研究者の数ほどあると言われることを示して、授業を通して宗教について一緒に考えていこうとする姿勢を強調する）

② 人類がいつから宗教を考え始めたのか

この問題を考えるヒントとして「人は必ず死ぬ存在である」として、「いのち」について一緒に考えてみる。そしてさまざまな宗教を例示して、宗教はそれが発生した地域によってその性格が大きく異なることや、宗教間の序列をつけるものでないことを説明する。

宗教は「有限な〈いのち〉を生きる人間がよりどころとするもの」として、さまざまな宗教の意味をしつかりと考えてお互いに尊重し合える生き方を学ぶ姿勢を示す。

第3回 世界の宗教（世界のさまざまな宗教）について

① 原始宗教・自然崇拜・アニミズム・シャーマニズムについて。

②宗教の類型化（世界中には宗教と呼ばれるものが七〇〇〇から八〇〇〇もあるという。主な宗教を一神教と多神教・世界宗教と民族宗教という座標軸で示して説明し、理解の手助けとする）

③各宗教の形成は、乾燥地帯や温暖湿潤地帯等、宗教が発生した地域の環境に大きな影響を受ける場合が少なくないことを説明し、宗教の性格が大きく異なることを理解できるようにする。

④特定の宗教に優劣をつけるのではなく、客観的な立場で説明する。

⑤世界の三大宗教（五大宗教）の特徴を創始者・成立時期・聖典・儀礼・聖地等の項目に分けて表示し比較してみる。

第4回 キリスト教について

①結婚式を取り上げて、カトリックやプロテスタント等について説明し、神父・牧師についてクイズ形式で学ぶ。

②現在は結婚式の多くが教会で行われているが、カトリックとプロテスタント・神父と牧師の違いさえ全く意識していない学生が大半というのが日本人の宗教意識の特徴でもある。そこで、身近な事例から宗教について考えてもらう。

第5回 イスラム教について

①イスラム教は日本人とは無関係と考える学生が多い。そこで、快適で便利な現代社会に目を向けて、それが石油の恩恵を受けていることを理解してもらう。

②産油国と日本が輸入する石油の量をクイズ形式で学びながら、イスラム教について理解を深める。

③テロ等が頻発しているため、イスラム教は危険な宗教という先入観を持つ学生も少なくないため、正しい認識を持つてもらえるような説明も工夫する。

第6回 宗教を理解するためのキーワード

① 宗教の起源は「人間に死があるから」とも言われるため、「生きること」「いのち」をキーワードにして宗教を考えてみる。

② 世界のさまざまな地域では、民族問題や聖地をめぐる紛争が繰り返されている。アメリカで二〇〇一年に発生した同時多発テロ・チベット族やウイグル族などの少数民族問題と宗教について考える。

③ 日本の癒しやヒーリング・スピリチュアル・パワースポットと宗教。宮崎駿監督の作品とアニメズムを紹介。

第7回 現代社会と宗教（情報化と宗教）

① 高度に情報化された現代社会において、宗教情報とどのように向きあつたらよいかについて考える。自分に近寄ってくる宗教情報と適切に対応しないと不利益を被ることもある。

② 大学のサークルとして行われる宗教活動について。

③ 人間の弱さと宗教情報。病気や孤独な状況と宗教への誘いとどのように向き合うか。

④ エセ（似而非）宗教やオカルトと日本における宗教教育（教育基本法第15条をめぐる問題について）。

⑤ 第二次大戦後に形成された新宗教や外国から伝えられた新宗教・二十世紀前半に形成された新宗教について。

第8回 科学時代の宗教

① 科学や医学が高度に発達した現代社会と宗教の関係について考える。

② アインシュタイン（二十世紀で最も優れた物理学者の一人）の言葉（科学の根底には宗教が不可欠であり、真の宗教は科学性を包含していなくてはならず非科学的な宗教では科学文明時代の正常な発展を妨げること

なる)を手がかりにしてこれからの宗教について考える。

③ 心の問題である宗教と科学は対立しているのか、科学や医学が進歩すると宗教は不要になるのかを考える。

第9回 生命科学と宗教（生命倫理・環境問題と宗教）

① 生命倫理と宗教について。科学や医学が進歩した結果、心臓移植や人工授精・出生前診断等、以前は想像でもできなかったことができるようになったが、それに伴って難しい決断を迫られる問題も発生している。

② 日本における脳死移植の問題と宗教の関係。日本で脳死による臓器の提供が少ない理由はなぜか。

③ 人工妊娠中絶と宗教について。

④ 日本と欧米の生命観や価値観と宗教の関係について。

第10回 仏教とはなにか（お釈迦さまはなにを説いたか）

① 日本人の生活に大きな影響を与えた仏教とはどんな教えか。

② 世界の三大宗教のひとつとしての仏教とその開祖・釈迦の人物像。

③ Buddha（真理の発見者）の教えとしての仏教の意味を考え、哲学と対比してみる。

④ お釈迦さまが説いた真理とはなにか。

第11回 仏教と私たちの生活

① 仏教が日本に伝えられてから一四〇〇年以上が経過し、日本人の生活習慣や価値観の形成に深く関わってきたことを、具体的な事例を紹介しながら考える。日常生活のマナーと仏教・年中行事と仏教・仏教が起源の日

常よく使う言葉・食事に見られる仏教の影響・文学に表現された仏教思想・茶道や香道と仏教の関係を紹介。
② 齒科衛生科の学生を対象にした授業のため、齒磨き習慣の形成にお釈迦さまと曹洞宗の開祖である道元禪師が果たした役割について説明する。

③ 日本の仏教のさまざまな宗派とその祖師について、著名な寺院と結びつけて概説する。

第12回 禅とはなにか

① 禅というのは坐禅のことで、お釈迦さまが悟りをひらいたときの姿である。インドの言葉では *dhyana* (ドフヤーナ) あるいは *jana* (ジャーナ) と言い、その発音から中国では禅という漢字で表現した。「静かに考える」という意味で、古くからインドで行われてきたヨーガの修行法のひとつであることを説明。

② 仏教ではどの宗派でも坐禅を行うが、特に曹洞宗や臨済宗では坐禅を修行の基本に位置づけている。

③ ストレスの多い現代人に坐禅がどんな意味を持っているか紹介する。

④ スタイーブジョブズを初めとした禅と関係の深い著名人を紹介する。

第13回 禅と私たちの生活

① 坐禅が中国に伝えられてから、ただ手と足を組んで坐禅をするだけでなく、日常生活のすべて（行住座臥…掃除も洗面も食事も入浴も）を坐禅と同じ意味を持った修行と考えるようになった。それが、日本人の細やかな心遣いの形成に影響していることを説明。

② 調理や食事作法にも影響している禅の教えを解説する。

③ 禅の影響を受けた日本文化（墨跡・能・庭園・建築等）について説明。

第14回 歯科衛生士と仏教について

- ① お釈迦さまが弟子たちに歯磨きの効能（口中の臭気を取り除く・食物の風味がよくなって食欲が出る・口中の熱を取り除く・痰を取り除く等）を説明して、歯を磨くことを習慣づけたことを紹介する。
- ② 道元禪師が歯磨きの仕方や洗面の方法を示した『正法眼蔵』の「洗浄」と「洗面」の巻を取り上げて、そこに記されている具体的な歯磨きの仕方や顔の洗い方を紹介し、現代と比較してみる。
- ③ 道元禪師が著した『典座教訓』（調理担当者に対する心構え）と『赴粥飯法』（食べる際の心得）を取り上げて、食べる意味や調理したり食事をしたりする際に心がけなければならない要点について考えてみる。
- ④ 仏教以外の歯磨きや歯ブラシの歴史等についても紹介する。
- ⑤ 横浜市にある「歯の資料館」（横浜市歯科医師会館）と日本に於ける歯の治療の歴史について紹介する。

第15回 鶴見大学の建学の精神と仏教

- ① 宗教に関する基本的な知識の必要性を再確認する。国際化がより一層進み、人や物の交流が活発になるにつれて相互の理解がさらに重要性を増すことを確認する。さまざまな国の人びとの生活習慣や価値観の根底に宗教が存在していることを確認し、お互いに尊重し合うことが重要であることを理解する。
- ② 日本人の生活や考え方の根底に仏教や禅の思想が深く根付いていることを再確認する。
- ③ そのうえで、仏教（禅）の教えに基づいた鶴見大学の建学の精神が、人間として生きる上にで大きな意味を持っていることへの理解を促す。

六、学生の受講態度と反応

授業は一年生約160名を対象にして実施するため、なるべく少ない時間で出席を確認するとともにできるだけしっかりと聞いてもらえるように、講義終了前の10分ほどで出席カードにその日の授業内容に関連したテーマに基づいて簡単なレポート（感想）を書いてもらっている。もちろん、一回目の授業開始時に、毎回のレポート内容も成績評価に加味することを説明していることは言うまでもない。

（1）一般的な関心の低さ（宗教に限らず、専門科目以外への無関心な傾向）

予想通りというのは言い過ぎかもしれないが、講義開始前に授業内容を読んできた学生はほとんどいない。選択科目なら内容を確認して興味のある科目を履修登録するはずだが、卒業必修のために予想した通り、完全な受け身であった。筆者の本務校でも経験していることであるが、最近の学生の多くは必修の専門科目以外には、たとえそれが将来の仕事や生活に役立つものであると教員側が考えても、なかなか関心を示そうとしない。大学生の学力低下とともに学習意欲の低下も問題ではないだろうか。

それはともかくとして、まず出席カードに書かれていた特徴的な感想を紹介してみよう。

《必修としての宗教学をどのように考えているか》

第1回の講義を始める前に、宗教に対するイメージや宗教学という授業に対する考えを自由に記述してもらった。プラスのイメージでもマイナスのイメージでも成績評価には影響しないと説明したことは言うまでもない。主なものとは次の通りであるが、全体の三分の二ほどが後ろ向きの方を示していた。残りのが学生は中立的な意識が多かったが、何人かの学生は積極的な学習態度を示していた。

《宗教学が必修であることに對する感想》（＊は否定的な態度、○は肯定的な態度）

- ＊歯科衛生科なのになぜ宗教学が必修なのか疑問に思った。
- ＊宗教学の学習が必要なのだろうかと思った。
- ＊宗教学があると知って驚いた。
- ＊宗教学があると知って大変そうだと思った。
- ＊仏教系の大学なので仕方がないと思った。
- ＊難しそうだと思った。面倒で最悪だと思った。重苦しくていやだと思った。
- ＊宗教は怖いというイメージがある。
- ＊いろいろな宗教がどのようなものか知らなかったので、とても気になった。できれば受けたくない。
- ＊授業でお経を唱えると思った。
- ＊なぜ選択科目にしないのかと疑問に思った。
- ＊自分は無宗教だから何も感じなかった。
- ＊洗脳されるのではないかと不安になった。
- ＊歯科衛生科で宗教学を学ぶのは珍しいと思った。
- ＊あまり興味はわかなかった
- ＊どんなことを学ぶのかまったくわからない。
- ＊何を学ぶか、なんのために学ぶのかわからない。
- ＊歯科衛生科の仕事をしていて、どんなときに必要なのかと思った。
- ＊キリスト教が好きなので、他の宗教を勉強するのはいやだった。

＊宗教に興味を持っていないので、必要のない授業だと思った。

＊どんな授業なのか不安に思った。

＊宗教を信仰させようとする授業ではないかと思った。

○大学に入学して宗教学があることを知って興味を持った。

○社会人として知っておいた方がよい仏教について勉強できると思った。

○宗教について全く知らなかったので、少し楽しみだった。

○せっかくの機会なので頑張ろうと思った。

○宗教についての知識がなかったので、必修でよかった。

○高校が仏教系だったので、特にいやだと思ったことはない。

○宗教学と歯科衛生の勉強がどう結びつくのか興味を持った。

○高校時代にも仏教を学んだので、少しわくわくした。

○おもしろそうだと思い、純粹に興味がある。

○これまで宗教について学んだことがないので、日本のことなどを知りたい。

○宗教学を学ぶことが不思議で、半分は不安で半分は楽しみだ。

○医療とは無関係と思ってやる気がなかったが、鶴見大学でしか学べないと思うと、すごく大切な授業だと思った。

○何を学ぶかわからないが、役立つのならきちんと学びたいと思った。

○普段の生活ではあまり触れることがない分野なので、いい機会だと思った。

○宗教のことを知らないのに、興味の持てる内容の授業をしてほしい。

《第1回目の講義を聞いた感想》

こうした反応は当然予想していたので、最初の講義では十五回の学習内容や学習する意味について特に丁寧に説明した。その結果、講義を聞いた感想では興味を持ったという記述が多く見られた。主なものを紹介しよう。

* 宗教がこんなに深いとは思わなかったので、興味を持った。宗教の違いから問題も起きるとは知らなかった。

* 日本人と外国人とで宗教の考え方が大いに異なることに驚いた。外国の宗教はどんなことをしているのか気になった。

* 宗教によって火葬したり土葬したり、宗教を理解していないと国際問題にもなると聞いて驚いた。基本的な宗教の考え方を知る必要があると思った。

* 今まで宗教は自分と無関係だと思っていたが、生活の中に深く関わっていることに気づいた。

* 日本と違って、世界では宗教が暮らしに大きく影響していると思った。

* 宗教に対する日本人の常識が世界では通用しないと聞いて驚いた。もつと世界の宗教について知りたいと思った。

* ひとつの国の習慣や価値観や決まりの背景に宗教があると知り、いろいろな国の宗教について知りたくなった。

* 宗教を学ぶと洗脳されると思っていたが、そんなことはなく、興味がわいてきた。

* 宗教には関心がなかったが、今日の講義を聞いてもつと身近なものとして考えなければいけないと思った。

* 相手の宗教を知るのは相手を気遣うことにつながるのではないかと深く考えさせられた。

* 自分では宗教に興味がなかったが、世界がグローバル化しているので、いろいろな宗教のことを知らないと大きな問題になることもあると思った。

* 宗教学が必修になっている理由がわかった。

* 今日の講義を聞いて宗教に対して興味を持った。

* 今まで宗教のことにはまったく関心がなかったが、少し興味が出てきた。

＊とても難しいけれど、面白そうだと思った。

＊私たちの生活にこんなに宗教が関わっているとは思わなかった。

＊宗教によって生活の仕方や文化も違ってくるのと知って驚いた。

出席カードには、三分の二以上の学生が「宗教に興味を持った」「もつといろいろなことを学んでいきたい」と書いていた。

(2) 自分に関係する内容だと顕著な反応

《第5回目の講義を聞いた感想》

第5回目の授業では、世界の三大宗教のひとつであるイスラム教を取り上げた。ほとんどの学生はイスラム教は日本人の生活とは無関係と思いこんでいた。また、イスラム教に対しては「危険な宗教」というイメージが極めて強いことも確かめられた。

そこで、クイズ形式で現代人の便利で快適な生活に石油がどれほど大きな役割を果たしているかを考えてもらった。石油は日本国内では生産できず、ほとんどを輸入に頼っていること、輸入先はほとんどがイスラム教の国であること等を説明し、輸入が途絶えた場合の影響を想像してもらった。そうした説明を通じて、イスラム教やそれを信仰している人びとの考え方を知ることの重要性に気づいてもらうことができた。

また、イスラム教徒に義務づけられた「五行」(信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼)を説明することによって、多くのイスラム教徒がまじめに信仰生活を送っていること、貧しい人びとのために喜捨をして助け合っていること等に感動していることが伺えた。

＊日本に石油を輸出している国の多くはイスラム教徒が多い国である。イスラム教はとても厳しい決まりがあり、

助け合うための喜捨は貧しい人に自分の収入を分けることで、なんて心が広いのかと思った。イスラム教はあまりいいイメージがなかったが、今回勉強してそのイメージが変わった。

*イスラム教についてなぜ勉強しなくてはならないのか、今日の話を聞いてよくわかりました。イスラム教のことを知らずにやりとりをしていたら、信仰者に対して失礼なことや起こらせたり問題になってしまうのだろうと思いました。それだけ、宗教は大切なのだとわかりました。

*私たちはイスラム教なんて関係ないと思っていました。でも、イスラム教のことについて学び、少し興味がわきました。豚肉を食べないのはなぜかを知ることが、他国の文化にも触れることができた気がしました。

*イスラム教という危険な宗教というイメージが強かったが、信心深くまじめに生活していると知り、見る目が変わった。

*イスラム教には、自分の収入の2.5パーセントを喜捨して貧しい人を助ける義務がある。助け合いながら生きていくことはとてもすてきなことだと思った。イスラム教に学ばなければならない部分があると思った。

*私たちがイスラム教をよく理解しておくことは、外交を行う上でも大切だと思った。

《第8回目の講義を聞いた感想》

第8回目の授業では、科学や医学と宗教の関係について考えた。科学と宗教は対立するものという考えがあり、科学や医学が発展すれば宗教は不要になるという人もいる。しかし、アインシュタインが指摘したとおり、科学と宗教は本質的に補完し合うものと言えるのではないだろうか。その理由は「人に死があるから」であり、この問題と向きあう方法は科学や医学だけでは不十分だからである。

ただ、高度に発達した現代の科学技術や医学の「表の部分」の恩恵を受けて生活している私たちには、このことは

なかなか納得したい問題ではないだろうか。そのため、講義後の感想でも、相反する考えが拮抗していた。

* 科学が進歩すれば宗教は不要になると思います。宗教は科学の正常な発展を妨げると 생각합니다。科学と宗教は対立すると思います。

* アインシュタインは科学の根底には宗教が不可欠と言っていますが、科学がもつと進歩すれば宗教は要らなくなると思います。

* 科学の発達と宗教の発展は親しい。宗教で病氣は直せないが、信仰することで心が救われ、気持ちが晴れることがある。科学が発達することはとても大切だが、重い病氣になったとき、科学で救えないこともあると思った。

* クローン人間や出生前診断など、医学が進歩したことによって出た問題をテレビで取り上げているのを見たことがある。そこにも宗教が関わっているのだと思った。

* 科学や医学が進むと、技術ばかりが先走りして人の気持ちを無視したりすることがあるかもしれない。そのときに宗教は原点に戻してくれる教えであると思う。

* 医学が進歩して寿命が延びてもいずれば死ぬし、老いていくので心の支えとなる宗教は科学が発達しても必要だと思った。

* 医学が進めば人の生と死の境界線がさらに難しくなると思う。だからこそ、人は宗教に対してもつと関心を持たなければならないと思った。

《9 回目の講義を聞いた感想》

9 回目の授業では、脳死問題を取り上げて、日本で脳死状態での臓器提供者が少ないことの背景に宗教的な生命観があるのではないかと問いかけた。その際に、自分の問題として考えるように二つの場面を設定した。①自分の子ど

もが先天性の心臓病で移植しか助ける方法がないと仮定した場合、脳死の人がいたら心臓を提供してほしいと思うか。
②自分の子どもが事故で脳死状態になったとしたら、心臓の提供を待っている人に「提供してほしい」と言われて「はい」と答えられるか。

仮定の話であるが、「提供はしてほしいが、自分の子どもが脳死状態であっても手足が温かく心臓が動いている状態で提供する気持ちにはならない」という答えが多かった。代表的な回答を紹介してみよう。

＊自分の子どもが移植を必要としていたら何何でも手に入れたと思う。その理由は、死んでしまったらもうすべてが終わってしまうから。反対に、私の子どもが脳死になってしまったとしても、たぶん提供できないと思う。しゃべれなくても目があかなくても、ずっと一緒にいたいと思うから。

このように回答した後で、「これはすごく矛盾していると思うが、日本人だったらほとんどの人がそうだと思う」と書き加えてあった。

宗教によって、「いのち」に対する考え方（生と死の境界）が異なる場合もあるため、日本人の臓器提供者が少ない現状等（海外に心臓移植の道を求める日本人が少なくないこと）について問題提起を考えてもらった。

＊脳死と言っても、心臓が動いているなら私は生きていきたいと思います。それでも、他の人に臓器を移植して助かる人がいるのであれば協力したいという気持ちもあり、とても複雑です。

＊脳が死んでも身体は生きているから提供はできない。

もちろん、なかには次のような回答をした学生もいるが少数派である。

＊臓器を提供します。すぐに現実を受け入れることはできませんが、脳死になったら提供します。心臓が動いていても話すこともできなく、ご飯を食べることもできないなら、人の役に立ってほしいと思います。

《第10回目の講義を聞いた感想》

10 回目の講義では仏教の教えやその教えと私たちの生活との関わりについて考えてみた。まず、真理の発見者としての Buddha の語意から説明し、仏教が哲学的・科学的に「いのち」の姿をとらえていること、仏教の基本である三法印（諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜）と「天上天下唯我独尊」を取り上げて私たちの「いのち」を理解してもらった。その結果、感想の多くが仏教を身近なものとして肯定的に受けとめていることから、仏教を難しい教えと思いついていた先入観を払拭することができたのではないかと思っている。

* 「天上天下はまさにそのとおりだと思えます。宗教と聞くとあまりよいイメージではないのですが、お釈迦さまの言葉には共感できて不思議な感じがしました。

* 仏教は人間も動物も植物もみんな平等ということを教えているのかと思った。「いのち」の大切さをどの宗教よりも強く伝えているのではないかと思った。「いのち」の真理などは理解するのが難しいけれど、お釈迦さまは偉大だと思った。

* 仏教の教えや特徴について知り、今までの仏教のイメージが変わりました。私は他の宗教と同じだと思っていましたが、実際はあまり宗教という感じがしませんでした。ふだん、あまり自分の「いのち」について考えることはありませんでしたが、今回の話を聞いて、自分の代わりになる「いのち」はないんだというお釈迦さまの教えに考えさせられました。

* お釈迦さまが言っていることは誰にでもあてはまることだから、どんな人でも学びやすいのではないかと思いました。奇跡ではなく、現実的で信頼できる教えだと思いました。

* 仏教がこんなにシンプルで命を大切にする宗教だということを知ることができてよかった。この教えをもっと多くの人に知ってほしい。

* 今まで、宗教の教えは難しく理解できないイメージがありました。今回、仏教についての講義を聞いて、お釈迦さまの教えはわかりやすいと思いました。それに自分にもあてはまる教えだと思いました。

＊涅槃寂靜という言葉を初めて知りました。その意味が「この世で幸せになりましょう」というようなことだと知って、いい言葉だと思います。

＊いちばん印象に残ったのは「涅槃寂靜」で、この命で幸せに生きようというのは、とてもすてきな教えたと思った。また、意識すると否にかかわらず、仏教が日本人の生活に深く根をおろしていることにも気づいてもらえたようである。特に歯磨きと仏教の関連に関心を持った学生が非常に多かったのは歯科衛生科の学生としては当然かもしれないが、授業で取り上げるべきテーマだと思っている。

＊私たちがふだん生活しているなかで、あたりまえに行っていることの多くが仏教と関連しているのだとわかった。ふだん使っている言葉や歯磨きの習慣が仏教と関係していることを知って驚いた。

＊いちばん印象に残ったのは仏教と歯磨きの関係です。お釈迦さまが歯磨きの効能を五つも弟子に教えていたことに驚きました。

＊仏教が直接に自分たち日本人の生活に関わっているとは思っていなかったけれど、私たちが知らず知らずのうちに使っている言葉や食べ物が仏教のおかげで使えたり食べられたりしていることに驚いた。

《第12回目・第13回目の講義を聞いた感想》

仏教を身近に感じたという感想は、禪に関する内容の講義でより多くなった。特に日本人の歯磨きの習慣形成に道元禪師が大きく関与したという説明は興味深く受けとめる学生が非常に多かった。さらに、トイレや入浴の作法等が日本人の他者への思いやりの心につながっていることにも感銘を受けたようである。

そして、道元禪師の著書である『典座教訓』や『赴粥飯法』をもとにした調理や食事の際の心構えについての説明には、より一層禪の教えを身近に感じることが伺えた。また、言葉を発して自己主張をする機会が多い現代社会では、「沈

黙」がどれほど大きな意味を持っているかについても、理解を深めてもらえたようである。それは、授業に先立って前期に行われた一泊二日の坐禅体験が大いに影響していると思われる。

(3) 一泊坐禅体験の持つ意味

筆者が担当する宗教学の授業は後期に行うため、一泊坐禅体験にあつたては専任の先生にオリエンテーションをしていただくだけである。そのため、宗教学の授業と関連を持たせることができないので、いくつかの特筆すべき感想だけを紹介しておきたい。なお、感想は次のテーマで書いてもらった。

①坐禅をしているときに思ったこと。(本来は無我の境地と説明されているが、坐禅中にはさまざまな「思い」が生じてくると思うので、そのことを書いてもらうのが目的)

②お寺の食事作法についての感想。(作法に従って食べるため、窮屈に感じることもあるかもしれないので、その感想を知ることが目的)

③坐禅中や食事中は「沈黙」が求められるが、これは日常生活と大きく異なると思うのでそれをどのように感じているかを知ることが目的である。

④座禅会全体の感想(感じたことを自由に書いてもらう)

感想はA3の用紙で字数の指定をせずに書いてもらっている。その内容や分量はさまざまだが、総じて初めての体験(ほとんどの学生にとって)を肯定的に受けとめていることが感じられる。

*ふだん話しながら食べていると、周りのことに気が向いてしまうけれど、食事だけに集中していると、自分たちが今こうして口になっているものは命を犠牲にしたもので、また一生懸命に調理してくれた人がいたからだと思います、あたりまえではないと感じました。

*自分自身と深く向き合う時間があり、食や自分についてじっくりと考えることができた一泊二日でした。

*あたりまえだと思っていたことがあたりまえでないこと、いろいろなことを考え直すことができました。

*ふだんはうるさい生活をしていますが、こうして沈黙すると心がとても安まるような気がしました。

*最初のうちは「話をしてはいけない」と言われると、とても辛かったが、慣れてくると気持ちが落ち着くようになった。

*食事中に黙って食べていると、食べ物一つ一つをよく味わって食べることができた。

*食事の前に「五観の偈」を唱えたので、食べる意味があらためてわかってよかった。

*ふだんはあたりまえと思っていたことが、とてもありがたいことだと思った。静かに自分の心と向きあうことの大切さに気づいた。

*坐禅会に行く前は食事中に黙って食べるということを聞いていやだと思っていたが、いつも以上に味わって食べたので、こういう食べ方もいいなと思った。

*坐禅中には小鳥の声が聞こえてきて、とても心が落ち着きました。これからはふだんあまり気にしなかった聞こえてくる音にも、もう少し注意してみようと思いました。

現代人の生活で最も失われてしまったのは「沈黙」と「静止」の時ではないだろうか。お釈迦さまが「中道」として説き示したように、生命存在の原則は「二拍子」である。具体的には「静」と「動」の調和を図ることである。このバランスを崩してしまったのが現代人の生活ではないだろうか。生物として私たちが人間性を回復し、本来の「いのち」を生ききるためにはこのバランスを取り戻さなくてはならないのであるが、坐禅はそのために最良の方法であると考えられる。なお、このことについては拙稿「坐ることは生きること」を参照してほしい。⁽⁸⁾

上述したように、現代人の生活では「沈黙」を保つ場面が非常に少ないが、修行道場としてのお寺では言葉を発してはいけない場面が少なくない。最初は戸惑うかもしれないが、声を出さないことで心が内側に向けて自分と向きあうことができる。多くの学生がそのことに気づいたことは重要な点であると思われる。

七、今後に向けて

十五回の講義内容はできるだけ具体的に学生の生活に身近な問題を取り上げながら展開することを心がけた。講義のテーマによっては抽象的な説明をせざるを得なかった部分もあったが、学生の生活や将来の仕事（生き方）に関係のある話題を提供すると、前向きに受け入れて関心を示すことが確認できた。

また、道徳的な意味の宗教は素直に受け入れる気持ちがあることや情報の提供の仕方によって、かなり強い興味を示すこともわかった。初めに紹介した阿満利磨やネルケ無方が指摘していることが、学生にもあてはまるものが受講後に提出する出席カードの記述から確認できた。

そこで、「宗教心は豊かなのである。ただ、その宗教心を〈特定の宗教〉に限定されることに抵抗がある」という阿満利磨の指摘をふまえて宗教学の講義を展開しなくてはならない。そうでないと、大学が理想としている建学の精神に基づいた理想とする人間像と学生の向いている方向がすれ違ってしまっているのではないだろうか。⁽⁹⁾

注

- (1) 阿満『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書一九九六年 八ページ
- (2) 阿満 前掲書八ページ
- (3) ネルケ・無方『日本人に「宗教」は要らない』ベスト新書二〇一四年 三ページ
- (4) ネルケ 前掲書一八ページ
- (5) ネルケ 前掲書一九ページ
- (6) ネルケ 前掲書二二ページ
- (7) ネルケ 前掲書二五ページ
- (8) 佐藤達全『坐ることは生きること』（曹洞宗宗務庁発行『禅の友』平成六年一〇月号掲載）
- (9) このことに関しては保呂篤彦『大学生への宗教教育』（筑波フォーラム76号、二〇〇七年六月発行）参照。